

言えないドレフュス事件
～『失われた時を求めて』への社会批評的アプローチ

有 田 英 也

- 1 語り手の不安
- 2 社会批評の可能性
- 3 ドレフュス事件史との照応
- 4 語り手の厚み
- 5 ユダヤ系フランス人の肖像～スワンとブロックの対比

「というのも、わたしたちは感じていることをたえず隠そうと決めているので、それをどう表現するかについてまったく思いをはせなかったからである。」⁽¹⁾

1 語り手の不安

1922年4月、この年の11月に死亡するマルセル・プルーストは『ソドムとゴモラ』第2部を発表した。この巻は『失われた時を求めて』のうち、作者の生前に発表されたものの最後にあたる。発表年を指摘したのは、作品のこの部分が、タイトルから容易に想像されるように同性愛を主題としていながら、1920年代の読者にはすでに馴染みの薄くなっていたであろう19世紀末のドレフュス事件にも言及しているからである。本論で試みられるのは、なぜかくもふんだんにドレフュス事件が『ゲルマントの方』『ソドムとゴモラ』『囚われの女』に書き込まれているかの解明ではなく、いかに歴史がテキストに書き込まれているか、そしてそのような書き込みのゆえに語り手像がどう定位されるかを考察し、その結果を踏まえてテキストの新しい読みを提示することである。

『ソドムとゴモラ』第2部の冒頭には次のような挿話が置かれている。初夏のある夕暮れ、語り手はコンコルド広場をゆっくりと歩みながら、

広場中央にそびえるルクソールのオベリスクを眺めている。すでに午後9時すぎだというのに沈まない夕陽は、この細い石柱に照り映えて「桃色のヌガー」に変貌させていた。時とともにオベリスクは金属質の光沢を帯び、「薄く、ほとんど曲がりそう」に思えた。折しも空にかかった半月は、この宝飾された金属でカットされ、皮を剥かれたオレンジのようだ。だが、月はやがて質感の異なる、「よりがっちりした黄金」の光沢を帯びて、ほのかに光る星をとめない、大胆に帆を張って船出するはずだ。語り手はゲルマント大公家の夜会に姿を現す機会を、広場にたたずんで窺っていたのである。

オベリスクと月の比喩に使われるヌガーとオレンジ⁽²⁾、そして石柱を隠喩で表した銀のナイフは、夜会に供されるご馳走の換喩である。月は社交界通信に見えるユベール・ロベールの噴水を楽しむ招待客の頭上にも輝くだろう。ほのかに光る「ちっぽけで哀れな星」に仮託された語り手は、時満ちて金色に輝く半月形の帆のはらむ風に乗ってセーヌを渡り、正統王朝派貴族の牙城たるフォーブール・サン＝ジェルマンに赴く。

だが、初めて訪れるゲルマント大公家の夜会は、ヴィルパリジ侯爵夫人の文芸サロン、ゲルマント公爵家の晩餐会と、次第に19世紀末パリの貴族たちの本丸に歩を進めてきた語り手にとって、易々と手に入る獲物ではなかった。沈まぬ夕陽に照らされたオベリスクには、胸元に突きつけられた鋭利な刃のような脅威が読み取れる。冒頭に、「わたしは招待されているかどうか定かでないこのゲルマント家の夜会に、急いで到着するつもりがなかったので、外で何もせず時をすごしていた」とある。みだりに人を寄せつけぬ由緒ある貴族の夜会に、本当に招待されていないかもしれないと感じる語り手は、せめて見知った人々の着いていそうな時刻まで暇を潰

さねばならないが、さりとして家で女中頭のフランソワーズとお喋りする気にもならない。語り手がみずからの心境を次のように言いきるまで、ふんだんに比喻をふくんだコンコルド広場の描写が、招待の持つ誘惑と脅威との両義性を際立たせる。ゲルマント大公家の館の前に立つ語り手は、「半時間前にわたしにつきまとい苦しめていた、招待もされずに参上するのではないかとの不安——それはじきにわたしを再び捉えるのだが——を思い出さなかった」。不安は語り手がそれを思い出さなくなった時に、テキストにそれと明示されたのである。

一人称の語り手は一人称で語る登場人物と同一でないという形式的な言明が、ここでは決定的な重要性を帯びる。プルースト小説の語り手は、大公家の門前の語り手が「思い出さなかった」が、わずか「半時間前に」コンコルド広場で痛感していた不安を、まず広場の情景に象徴した。比喻に富んだ風景描写がそれである。次にその不安からひととき解放された語り手の心境を事後的に語った。さて、その不安、つまり「招待もされずに参上する」のではないのか、という疑念から生じる不安は、いったい何を根拠としているのだろうか。それは長い重要な挿入部を挟んで、前編『ゲルマントの方』の末尾に記されていた^③。

ゲルマント大公夫人からの招待状を受け取った語り手は、それが自分を陥れようとする誰かの奸計ではないかと疑った。そこで大公夫人の真意を、そこに必ず招待されているはずのゲルマント公爵夫妻に問い合わせようとした語り手は、折悪しく夫妻がパリを留守にしている夜会の当日までキャンヌに居ると知る。ところが、ゲルマント公爵家と語り手の家は中庭を挟んで続きにあったから、彼は待ち伏せしようと思いついた。首尾よく夜会の前に公爵夫妻と会えたものの、公爵は意地悪心を起こし、夫人の方は気まぐ

れから、語り手に招待の真贋について教えてくれなかった。このように、小説は不安の原因を、あたかも無為で複雑な企みの交錯する社交界では奸計こそが新参者を待つ必須の通過儀礼であるかのように、語り手の愛読している回想録に言及しながら説明している。

だが、そこに言い落とされている主題を見逃してはなるまい。『ゲルマントの方』から『ソドムとゴモラ』前半の語りが展開される1年半の間には、共和国大統領への公開状「わたしは弾劾する」で軍人らを侮辱したかどでエミール・ゾラが名誉棄損で告訴されて裁判にかけられ、その後、陸軍参謀本部のアンリ中佐の偽書の発覚と自殺を経て、翌年6月初旬にドレフュスの再審が決定されたからである。フランスを震撼させ、国論を二分させたドレフュス事件は、後述するように『失われた時を求めて』で凝縮して語られる二つの社交界の集まりの中心的主題をなしている。貴族社会への参入を果たそうとする語り手にとって、ドレフュス事件を適切に語り、あるいは語らずにすませるのは、主人公の教育の重要な階梯だった。

小説を構造主義的行為論の立場から分析したグレマスの用語を借りれば、プルーストの語り手はこの件にかんしてさまざまな「援助者」を持っている⁽⁴⁾。

語り手の理想化された分身と見なせる友人サン＝ルーは、若き侯爵であり軍人であるのにドレフュス再審を支持したため、普仏戦争で戦死した実父がかつて会長を勤めた名誉あるジョッキー・クラブへの入会が困難をきたしている。社交界入りを試みる語り手にとって、自分よりはるかに恵まれたサン＝ルーの試練は教訓となる。

また、語り手のかつての級友ブロックは劇作を志すユダヤ系フランス人である。彼は貴族社会の内奥に迫ろうと、彼女自身が回想録作者である

ヴィルバリジ侯爵夫人のサロンに出入りしていたが、ゾラ裁判の渦中で露骨にドレフェス派ぶりを披瀝してしまった。そのため、やはりサロンに入り込もうとしていた歴史家から「サンディカ」⁽⁵⁾の密偵だと女主人に告げ口され、暇乞いの際に挨拶してもらえない。ブロックは女主人が眠っていたのだと納得するが、そうでなければこの仕打ちは立入禁止にも等しい。しかも、居合わせた語り手は、サロンからの帰途、庇護者を買って出るシャルリュス男爵からブロックへの非難を聞くことになった。「もし君の友人（ブロックのことである）の同国人がユダヤ王国を裏切ったのなら祖国に対して罪を犯したことになるが、彼 [アルフレッド・ドレフェス] はフランスと何の関係があるのか」⁽⁶⁾。これは反ドレフェス派の闘将モーリス・バレスが『ナショナリズムの情景と教義』に書きつけた言葉を、間接的に引用したものと見なせる。そして、その意味においてブロックは社交界でユダヤ性を際立たせた失敗例として「援助者」の機能を果たし、シャルリュスは語り手の立場如何で、彼の社交界進出の「援助者」にも「敵対者」にもなりうる。

そして、前述のゲルマント大公夫人の夜会の直前、語り手はゲルマント公爵家でシャルル・スワンに久しぶりに再会している。スワンはドレフェス派を明言し、これまで彼を受け入れてきた様々なサロンや貴族の催し、さらにはジョッキー・クラブに出入りできなくなっていた。語り手が、どうしてゲルマント家の全員が反ドレフェス派なのかと訊ねたところ、「まず、彼らがすべて反ユダヤ主義者だからだよ」⁽⁷⁾とスワンは答えた。そう言いながら彼は、その晩、フォーブール・サン＝ジェルマンの反ドレフェス派の巢窟に赴くわけである。物事の隠れた意味を教えてくれる先達という意味で、スワンは語り手の知的な「援助者」と見なせよう。

これらの寸評は、語り手のめざすものが、グレマスおよびその理論的先駆者であるプロップの対象とした民間説話や教養小説ほどには明瞭でないために、いささか説得力を欠いている。そもそも語り手はドレフュス派だろうか。一般にブルースト小説の作品論では、このように問われることはあまりない。だが、物語の語り手が登場人物でもあるからには、そのドレフュス再審運動に対する意見のありようが、少なくとも事件が話題になってからの語りには、彼が同性愛者であるかどうかの問いと同じほど重要なはずである。

もし語り手がドレフュス派なら、受け取ったゲルマント大公夫人の招待状は偽物かもしれない、夜会に赴いても招待客の面前で侮辱され追い返されかねない。しかも、元大使ノルボワの、「あなたのような方々のご努力は、もしわたしたちが政権を取れば後押しされるにちがひありますまい」⁽⁸⁾というお世辞に喜ぶブロックや、「ドレフュス派の意見を女優[愛人のラシエル]に負っていた」⁽⁹⁾ロベール・ド・サン＝ルーなど、それぞれ欠点を伴いながらドレフュス派を公言する人々について、これから語り手はどう語り、彼らとどのように交際してゆくのだろうか。

それとも彼は反ドレフュス派だろうか。ならば語り手は、「ブルジョワ的で潜在的な反ユダヤ主義が目覚め、激発の域に達した」⁽¹⁰⁾ヴェルデュラン夫人のような、社交界で成功する野心に憑かれたような女性に、どう対処してゆくのだろうか。スワン夫人もまた、社交界の反ユダヤ婦人連盟に所属するまでに、夫のドレフュス派ぶりを懸念し、ナショナリズム感情を募らせていた。

作中の登場人物をドレフュス事件が二分しつつあった。語り手も物語の登場人物の一人であるからには、言説のはらむ抗争に巻き込まれざるをえ

ない。だが、プルースト小説が、作品にその名に見えるジョゼフ・レナックのように、大部の著書『ドレフュス事件の歴史』⁽¹¹⁾を楯取って、遍在する全知の語り手の立場から事件の真相を叙述したとしたらどうだろうか。ここで問題となるのは、レナックの陥ったアンリの役割の誤解やイエズス会の陰謀説への加担、あるいはベルナル・ラザールの過小評価といった過誤だけではない。あくまで物語の展開に寄り添って成長する語り手と、この遍在し全知の語り手の権能とが矛盾をきたせば、小説は内側から壊れるのである。そのため物語の展開を司る語り手は、文芸サロンの主宰者ヴィルパリジ侯爵夫人が寝たふりをしてドレフュス派青年を懲らしめる一方で、決定的な立場の表明は曖昧にしてすごしたように、物語に横溢する親ドレフュスおよび反ドレフュスの言説に対して身構えねばならない。その構えを、ひとまず政治的曖昧さと呼ぶことができる。

2 社会批評の可能性

ところが、作者プルースト自身は、その人生の幾つかの画期において、彼が『失われた時を求めて』の語り手に付与したような政治的曖昧さとはほど遠い行動をあえてしている。プルーストの名は、ゾラの「わたしは弾劾する」がクレマンソーの『ローロール』紙に掲載された1898年1月13日の直後の、いわゆる「知識人の署名」に見える。アカデミー・フランセーズ会員アナトール・フランスに署名を懇請したのはプルーストだとも言われている。彼は作中のブロックのようにゾラ裁判を傍聴し、この時期に習作『ジャン・サントゥイユ』の中で裁判の様様を描写している。作中のジャンに使われた表現が、プレイヤッド新版の注にあるように、そのま

まブロックの行動に転用されている⁽¹²⁾。

また、レンヌ再審でドレフュスがふたたび有罪となったことを、旅先から母親に「カジノに張り出されて全従業員が大喜びした恥ずべき判決」(1899年9月10日、エヴィアンから)と書き送っている⁽¹³⁾。

しかしながら、プルーストはかつてのドレフュス派急進社会党議員らが修道会を攻撃したことに反発し、コンブ内閣が成立させクレマンソー内閣が断行した政教分離法に宗教的見地から反対している。つまり、プルーストはフランスの知的・宗教的伝統を重んじる保守主義者であって、これは『失われた時を求めて』の語り手がカトリック教徒で、コンブレーの教会ならびにランス大聖堂に深い愛着を抱いていることと合致している。

ところが、彼はモーリス・バレスなどナショナリスト作家が第一次世界大戦前夜にカトリック信仰と民族的=人種的アイデンティティを重ね合わせ、戦後は戦勝国としてフランス文明を喧伝するのを許さなかった。カトリック信徒を気遣ったとはいえ、プルーストは国粋主義者の逸脱に異を唱えられるほど理性的だったわけである。

したがって、もしプルースト小説にスタンダール小説に見られる「作者の介入」があるならば、そして事実それは語り手の述懐にしばしば読みとれるのだが、差し挟まれた「作者の思想」なるものは、プルーストの人生のそれぞれの時期のそれぞれの政治状況に応じて変わらざるをえない。そして、プルーストはただひとつの挿話を描くさいにも複数の視点から注釈を付けるので、そこにおのずと批判的叙述が生まれる。少し長いが、『失われた時を求めて』で初めてドレフュス事件に言及された箇所を引用しよう。『花咲く乙女達の陰で』でスワン夫人がなぜ社交界で冷遇されているかを記すくだりである。

「このような社会環境に暮らしていた人々は、《オボルチュニスト》、いわんやあの恐るべき《ラディカル》を絶対に招いてはならないということが、石油ランプや乗り合い馬車のようにいつまでも続くと考えていたのだった〔オボルチュニストとはドレフュス事件までの第三共和制議会を主導した日和見的共和派で、ラディカルとは反教権運動を主導した急進派のこと〕。だが、間をおいて回る万華鏡のように、社交界は人々が不動だと思こんでいた要素を次々と異なった風に並べ替え、別の形を作ってみせる。わたしがまだ最初の聖体拝領をしていなかった頃、保守的なご婦人方は訪問先で優雅なユダヤ女性と居合わずと仰天したものである。万華鏡のこの新しい配置は、哲学者が基準の変更と呼ぶものによって引き起こされる。わたしがスワン夫人のもとに参上し出した頃よりやや後、ドレフュス事件が新たな配置換えを行い、万華鏡は色とりどりの菱形模様をいま一度ひっくり返したのである。ユダヤ的なものは、優雅な貴婦人であれ一切が地に落ち、上昇した凡庸なナショナリストに地位を奪われた。パリでもっとも華やかなサロンは、あるオーストリアの大公のものだった。もしドレフュス事件のかわりにドイツとの戦争が起きていたら、万華鏡は反対に動いたろう。衆目を眩らせたことにユダヤ人は愛国者ぶりを示したから、彼らは地位を守り、もはや誰もオーストリアの大公のもとへ行きたいとも、いやかつて行ったことがあると打ち明けることもしなかったろう。』⁽¹⁴⁾

この合わせ鏡のような錯綜する語りにおいては、語り手がどの時点から事態を眺めているのか不明瞭である。だが、それが非常に見通しの利く地点であることは確かだろう。そこに立てばドレフュス事件以前のオボルチュニスト共和制、つまり貴族たちに支持された共和国大統領マクマオン元帥の勢力を選挙で破った左翼政権の時代（『《オボルチュニスト》、いわ

んやあの恐るべき《ラディカル》) から、「ユダヤ的なもの」一切が「地に落ち」たドレフェス事件を貫いて、さらに第一次世界大戦緒戦のユダヤ系フランス人およびユダヤ系移民たちの前線勤務への志願、すなわちモーリス・バレスでさえ彼らを「フランスの霊的家族」と呼んで称えたユダヤ人の「血の貢献」までも仮定として取りこめる。それは遍在する全知のまなざしである。

ドレフェス事件のプルースト小説への書き込みに注目すれば、読者は作品の政治性に気づかざるをえなくなる。それほど多くないとはいえ、この種の研究は存在する。

ジャン・ルカナッチの『マルセル・プルーストのユダヤ的輪郭群』は、作品に散在するユダヤ性を帯びた登場人物を、その頭部の描写に注目しながら検討する⁽¹⁵⁾。結論をいえば、ユダヤ性はブロックのような黒い縮れ毛によって表象され、フランス性ないし「フランス的芸術 opus francigenum」は、「コンプレーの周囲の牧場の花に止まった小さな蝶のように完ぺきなデッサン」の鼻梁と金髪、薔薇色の肌に表象される⁽¹⁶⁾。ルカナッチがプルーストの伝記的事実でなく作品を引用して論じ、また研究者自身がドレフェス事件当時のユダヤ系フランス人に同情的であるだけに、その人種主義を思わせる論の運びがかえって説得的である。ルカナッチによれば、プルーストが母親の接吻を不安におのきながら待つ少年を執拗に描くのは、母との愛情を妨げる第三者の存在によるものであり、プルーストが2歳の時に弟が生まれ、その時に喘息の発作が始まったのは偶然ではない。それでは、彼がユダヤ人であることと同性愛者であることは、どのように不安に干渉しているのか。ルカナッチは、「ユダヤ性はそれより前に居座っていた神経症にあって副次的な役割しか果たさなかった」。だ

が、「プルーストについては、事件当時の彼は『失われた時を求めて』の] 語り手よりもジャン・サントゥイユの方にずっと近い。彼がドレフュス派に与^{くみ}したのは、証拠を調べたからというよりも、自発的な心の動きによってドレフュスに同族の兄弟を認めたからである」⁽¹⁷⁾。濡れ衣を着せられた大尉は、「幼時から被追放者の星のもとで耐えてきたマルセル・プルースト」の相同物だとルカナッチは主張する。

プルーストの神経症についてはすでに定評のある論考があるが⁽¹⁸⁾、ここでルカナッチの神経症説に注目するのは、『失われた時を求めて』の叙述そのものが在りし日のプルースト自身に対する批評になっているとルカナッチが推測しているからである。

ルカナッチは初期の習作『ジャン・サントゥイユ』におけるドレフュス事件の役割を重視している。コーヒーを魔法瓶に詰めてゾラ裁判を傍聴するほど熱心なドレフュス派だったジャンの人物像は、事件当時の作者自身に『失われた時を求めて』の語り手よりもずっと近く、それが最終的にはブロックとサン＝ルーとに分かれ、それぞれユダヤ性とフランス性を分有するとされる。事実、プルースト小説には、「ブロックはドレフュス派を論理的に選びとったと信じていたが、しかし彼の鼻、肌、髪の毛は人種によって自分に押しつけられたということを知っていた」と書かれている⁽¹⁹⁾。ルカナッチに即して論を進めれば、ゾラ裁判当時の自分の行動を振り返ったプルーストは、1920年代に出版された『失われた時を求めて』で、実在するユダヤ系政治家レナックと架空のユダヤ系フランス人ブロックのドレフュス派活動を人種から説明してみせ、そうすることでかつて易々とドレフュス派になってしまった自分を笑っているのではないだろうか。そこにユダヤ人の母親を持ち、幼時からカトリックとして育てられた

作者プールの、屈折した同族嫌悪を見いだすことは困難でない。

すると、未発表作『ジャン・サントゥイユ』で教養小説さながらの理想の父親探し（レヴェイヨン家）とドレフェス再審運動を行った主人公ジャンの人物像は、ゾラ裁判当時のプールの欲望が現実に代わって実現される仮構（ファンタズム）だったのかもしれない。おそらく、ひとたび小説執筆による癒しを経験した作者は、『失われた時を求めて』でふたたびドレフェス事件とゾラ裁判を扱うさいに、このジャンを社交界の人々から嫌悪され打ち捨てられる自己の否定的部分としてのブロックの人物像と、その容貌が称えられ渴望されながらも、その軽薄さが辛辣に描かれてもいるサン＝ルーの人物像とに分かったのだろう。ならば、ブロックとサン＝ルーに区分され分析的に描かれた肖像は、語り手のある時点（後述するようにゾラ裁判からドレフェス再審の決定以前）における理想の自画像に導く下絵になる。この自画像に描かれているのは、半年以上過ぎた『ソドムとゴモラ』のゲルマント大公夫人の夜会で、語り手に事件の衝撃的な情報⁽²⁰⁾を伝える、やはり架空のユダヤ系フランス人、シャルル・スワンである。

本論はこれを「5 ユダヤ系フランス人の肖像～スワンとブロックの対比」で検討するが、ルカナッチの行論との違いに触れておこう。ルカナッチはユダヤ系フランス人が「ゲッターから出るための三つの鍵」を、「戦争で英雄になれる」「金銭で出自の卑しさを消せる」「芸術で社交界へのパスポートを得られる」としている⁽²¹⁾。スワンは普仏戦争の軍功によるレジョン・ドヌール勲章と財産で前二者を手に入れたが、フェルメールの発見者ではあってもたんなる芸術愛好家にとどまった。したがって、スワンは『失われた時を求めて』（とりわけ『囚われの女』）で芸術制作に目覚め

る語り手の反面教師となる。だが、本論はユダヤ性そのものが、ルカナッチのいう「ゲッター」の否定性から切り離された歴史に投影される時、ある種の莊嚴さを帯びるのではないかと考える。

一方、J. カナヴェジアの『プルーストと政治』は、やはりドレフェス事件と作品および作者とのかかわりを論の中心に据えて、「誹謗文作者」としてのプルーストの才能に注目する⁽²²⁾。『ジャン・サントゥイユ』と『失われた時を求めて』の政治的人物は、職業政治家であれ知識人であれ、こと政治に関するかぎり絵入り新聞の読者を楽しませたであろうカリカチュア（風刺画）の趣で描かれている。

たとえば社会主義に共感する若き侯爵サン＝ルーが、じつはマルクスが『共産党宣言』で冷笑した「封建的社会主義」の権化であることが、御者へのきつい物言いから彼を「偽善者」と罵るフランソワーズによって暴かれる⁽²³⁾。ただ、この箇所は、語り手にそれを咎められたサン＝ルーが、御者とは自分の親戚たち（つまり貴族たち）と同じくらい対等なのに、ことさら丁寧に話しかけるだなんて、「君は貴族のような口を利くね」と（貴族でない）友人をたしなめるから少し複雑である。プルーストは登場人物の性格なり心理を、言葉の端々を取りあげてデフォルメするが、これこそ政治ジャーナリズムの得意とする局部拡大的なカリカチュアの技法である。ところが、登場人物はそのため単純化されて類型化するどころか、執拗な描写の果てにかえって奥行きを増す。

参照ページを一切つけずに作品を引用するこの本の主張を、十分に汲み取った自信はないが、カナヴェジアの政治的立場は次の一節に明らかだろう。

「当時のユダヤ系フランス人にとって、個人の悲劇 [訳注 アルフレッ

ド・ドレフュスへの断罪]の後に、おそらく集団としての悲劇が予想されていた。つまり、フランス大革命と、次いでナポレオンの第一帝政が彼ら(とプロテスタント)に賦与していた心地よい状況の見直しである。ついに完全な市民となり、あらゆる市民的権利を享受し、さらに高位に登ることもしばしばあった[ユダヤ系フランス人の]多くは、《同化》のカードを心安らかに使うことだけを望んでいた。ところが突然、このカードが取りあげられた。そこで、『今にもドレフュス事件はユダヤ人を社会の最下層に突き落とそうとしていた』という、プルーストの苦々しい言葉が書かれた。それはある意味で正しいが、ある意味で、と言うにとどまる。左翼と反軍主義者の同盟者で、右翼と愛国主義者から憎まれていたユダヤ人は、実際に国境を越えて《社会主義インターナショナル》に追いやられていたからである。だが、30年後、レオン・ブルムとともに、このインターナショナルが彼らに権力を引き渡すだろう」(下線は引用者)⁽²⁴⁾。

引用文中のプルーストのテキストは、『ゲルマントの方』でヴィルパリジ侯爵夫人のサロンを初めて訪れた語り手の感想であり、時期は1898年早春、つまりゾラ裁判当時にあたる。カナヴェジャはプルースト小説に見いだされる「苦々しさ」を当時のユダヤ系フランス人の感情とした。これは後述するように必ずしも誤謬でない。だが、フランス政治史上初のユダヤ系首相となったブルムの人民戦線内閣を外国勢力(国際ユダヤ組織)の謀略とみなす1930年代の極右思想をカナヴェジャが受け継ぐ時、この研究は文学の名を借りた政治評論だと非難されても仕方がないだろう。そして、ユダヤ系フランス人ならではの苦々しさこそが、プルースト小説そのものではないにせよ、その政治性の源泉だとするカナヴェジャの説は、ジャン・サントゥイユに仮託されたドレフュス派作家マルセル・ブルース

トにならあてはまっても、前述のごとく社会階層の配置転換を「万華鏡」の比喩で語る『失われた時を求めて』の語り手には適合しない。

以上の研究はプルーストの伝記をめざさず、書簡集を援用してもあくまで作品を頼りに論を組み立てている。本論もその立場を採るが、ドレフュス事件と『失われた時を求めて』の関係について、もっと厳密な方法論と、プルーストのテキストに対しても向けられる批判精神とを伴い、かつ最新の研究成果にもある程度目配りした研究を探せば、社会批評（ソシオ・クリティック）と呼ばれる、文学作品を同時代のさまざまな言説と関連させて読み解く社会科学的手法に行きあたる。その見取り図はとりあえず、エリシュワ・ローゼンがテルアヴィヴ大学で開催されたシンポジウム「ドレフュス事件～百年を経て」で報告した、「文学・自伝＝虚構・歴史、『失われた時を求めて』の中のドレフュス事件」に求められよう。

ローゼンの関心は社会批評の理論構成にあり、プルースト作品を社会の実相を映す鏡と見なす素朴な反映論に立脚してはいる。その鏡はしかし、「当時のフランス社会でアイデンティティの徴にならない性質と、徴になる性質との落差を、慎ましく（あるいは野放図に）楽しむ語り」を導入して得られたものであり、「徴なし」の筆頭が語り手であるのに対して、「少数者（ユダヤ性）にせよ周縁（同性愛）にせよ、プルースト的アイデンティティの徴を帯びた性質は登場人物の水準において、それもそれぞれが語り手の分身であるスワンとシャルリュス男爵に見いだされる」⁽²⁵⁾という指摘は卓見であろう。社交界入りに腐心するうちドレフュス事件の真相を見極める役割を担ってしまった無徴の語り手は、彼を魅了する、分身といってもよい人物たち（ここにサン＝ルーもブロックも加えてよいだろう）の言動を解析しながら、事件当時のフランス社会に浮かび上がった徴

をひとつずつ解読してゆくのである。

ルカナッチの語る神経症は、オレンジに見立てた月に急き立てられてゲルマント大公夫人の夜会に赴く語り手の不安について、その心理の襲を垣間見させてくれるだろうし、ローゼンの徴=無徴の弁証法めいた図式は、登場人物に注がれる語り手のまなざしの重要性を教えてくれる。語り手がどのようにドレフュス派ないし反ドレフュス派であるのか、という問いに、作者プルストがどうだったかを答えて済ませるわけにはゆかない。むしろ、語り手の言説が他の登場人物の明瞭に親ドレフュス、あるいは反ドレフュスの言説とどうかかわり、そして彼らの言動と容貌をどのように描写し、さらにその交錯が小説全体の構成とどうかかわっているのか、を問わねばならない。最後の問いはこう言い換えられる。ドレフュス事件が『ジャン・サントゥイユ』のように（またマルタン・デュ・ガールの『ジャン・バロワ』のように）裁判所ではなく、フォーブール・サン＝ジェルマンの社交界を通して描かれたことで、『失われた時を求めて』の物語叙述のメカニズムにおいて、どのような結末が与えられたのだろうか。

歴史叙述と物語叙述の混在するテキストを読む前に、次の予備的考察が必要である。

(1) 『失われた時を求めて』と歴史とのかかわりで重要なものには、ドレフュス事件の他に第一次世界大戦もある。なぜ、ドレフュス事件を特権視するのか。

歴史は普遍妥当的な真実であるというより、さまざまな語られ方をして成立する一つの言語的構築物である。複数の語り手を交錯させる手法は、現代史を生き生きと叙述する仕方のひとつである。ドレフュス事件が立場の異なる登場人物によって語られるように、第一次世界大戦も、これは語

り手が病弱なので前線兵士あるいは担架兵として見聞できないことに由来するのだが、さまざまな人物に語られて作中に収まっている。プルースト小説の独創性は、それらの語りがフォーブール・サン＝ジェルマンの社交界を通して描かれることである。

たとえば、シャルリュス男爵は、「ムッシュー、わたしはアメリカ人の悪口を言いたくない。どうやら彼らは無尽蔵な寛容さの持ち主で、しかもこの戦争にオーケストラ指揮者はいないのだから、各人が他の者が踊り終わって随分してからダンスに加わるらしい。アメリカ人はわたしたちがほとんど終えた時点で始めていて、四年間の戦争がわたしたちにとって鎮静させた熱情を持てるのだ」⁽²⁶⁾と長広舌の合間に指摘する。聞き手に回った語り手は、アメリカ参戦に沸き立つ世論に水を差すシャルリュスを遮らず、また男爵家の出自のドイツに言及しない。「戦争を続けようとする人は、おそらくそれを始めた人と同じだけ有罪だ。いや、たぶんもっと罪深い。なぜなら、後者は戦争のあらゆるおぞましさを予見しえなかったからだ」⁽²⁷⁾という、男爵の箴言めいた断定が、戦時下の言説の標本としてよりほかに小説に収まる場所がないからだろう。語り手はきわめて受動的である。これと対照的に、ドレフュス事件についてなら、語り手は再審派の議会政治家レナックや外国籍ユダヤ人の行動、さらにアンリ偽書の評価にまで積極的に言い及ぶ。

(2) 作者プルースト自身は、1913年から巻を追って出版された自作の最終巻で、小説にモデルや現実の反映を見ることを咎め、また芸術作品に政治的主張を盛り込むことを拒否している。社会批評は作者の懇請に反していないだろうか。

しかし、プルーストが芸術作品を現実、なかならずく政治から切り離れた

のは、第一次世界大戦の語られる『見いだされた時』においてであってドレフュス事件を語る部分ではない。いまここに展開する現代史の事件を叙述する場合に、職業的に言語を司る作家には特別な義務と責任があると主張した人々がいた。その好例であるナショナリスト作家、モーリス・パレスに答えて、プルーストの語り手は最終巻『見いだされた時』で、こう反論している。「緒戦においてパレス氏は、芸術家（ここではティツィアーノのことである）は何よりも祖国の栄光に奉仕せねばならない、と述べた。だが、芸術家は芸術家であることによってしか、つまり彼がこれらの法則を吟味し、経験を構築し、発見をなす時に、たとえそれが祖国であるにせよ、みずからの目の前にある真実以外の何ものをも考えないという条件でしか、祖国に奉仕することはできない。革命の御用画家たちを全部あわせた以上にフランスの誉れである画家、ワットーとジョルジュ・ドゥ・ラ・トゥールの作品を、その《公共精神》ゆえに、破壊しないまでも蔑ろにした革命家たちの真似はよそう」⁽²⁸⁾。プルーストが芸術を国家存亡にかかわる問題から切り離しているのは、ひとまずナショナリストに反論しようとしてのことだったと言いうる。

その芸術至上主義的観点から、またパレス（かつての反ドレフュス派）流の愛国文学への反抗心から、プルーストは第一次世界大戦の叙述を小説論と織りあわせて構成している。したがって、ともに『失われた時を求めて』に表象されることで特異な歴史叙述を得ているとはいえ、ドレフュス事件が社交界にたむろする人々の言説を通して意外な真実を暗示するのに対して、第一次世界大戦はこれに翻弄されて決定的に変貌を遂げた社交界を明示するにとどまる。小説の結末として第一次世界大戦は有効であっても、プルーストの文学論が語り手の叙述に混在している『見いだされた

時』を通して戦争を批判的手法で捉えるのは難しいだろう。「真実の人生、ついに発見され見極められた人生、したがって唯一実際に生きられた人生、それが文学なのだ。ある意味で芸術家の人生と同様、あらゆる人間のすべての瞬間に住まうこの人生。だが、彼らにはそれが見えず、それは彼らがそれを見極めようとしなからだ」⁽²⁹⁾という人口に膾炙した一節には、『見いだされた時』を語り終えたプールの語り手が、みずからの作品の執筆に向かう後ろ姿が認められる。その時、見る事が断念された現実には、社会批評は目を向ける。

プールの小説においては第一次世界大戦もドレフュス事件も、ともに語り手がバレスをはじめとする作家たちとの対峙を通して書く意志を固め、また書くための手法をつかむために言説を抗争させる一種の闘技場に見立てられる。シャルリュス男爵は語り手の反論に答えてバレスを評価し（「ランス大聖堂はわれらの歩兵たちの生命ほど高価ではない、と書いた彼は感動的で優雅だ」⁽³⁰⁾）、語り手は男爵に国粋作家モーラスを読ませた。語り手が危険にさらされないからといって、この闘技場を政治的に無色な芸術とは見なせない。

(3) ドレフュス事件を扱う『ゲルマント家の方』『ソドムとゴモラ』、そして『囚われの女』冒頭は、言説の抗争を通して、歴史と語りの真実をいかに語り伝えるかを探求する実験室である。ならば、語りの位相（時系列と認識範囲）はドレフュス事件をめぐるどう錯綜しているのか。

読者が小説に読むのは登場人物の言葉だけではない。語り手自身の発した言葉、そして語り手の意見もある。たとえば、サン＝ルーが愛人ラシェルのせいでドレフュス派になったという意見は、語り手が地の文で付した解説であるとともに、彼がヴィルパリジ侯爵夫人のサロンで聞いたゲルマ

ント公爵の言葉（「おそらくあの淫売のせいで頭に血がのぼったのだ。あの女が彼を《知識人》に与するよう説得したのだろう」⁽³¹⁾）の裏づけでもある。さて、語り手が解説したのはサロンの挿話の前である。それでは、サン＝ルーが「ドレフュス派の意見を女優に負っていた」とは、語り手がサン＝ルーとラシエルの口論を眺めて感じたことなのか、直後のヴィルパリジ侯爵夫人のサロンでの見聞を逆流させた意図的な時系列上の錯誤なのか、それともそれは物語られる時間から独立した、ある語る現在時に属する判断で、とりあえずプルーストと名づけてよい作者が、すでに口論の挿話には、はるか先のゲルマント大公夫人の夜会でのサン＝ルーの前言撤回⁽³²⁾への伏線を敷いたのだろうか。

逆説的だが、作者プルーストが実際にドレフュス再審運動に参加し、かつまたゾラ裁判の時期に執筆されたとおぼしい『ジャン・サントゥイユ』で事件が主人公の成長の画期とされていたからこそ、後年の『失われた時を求めて』ではドレフュス事件をめぐる語り手の政治的立場が曖昧にされた。その結果、登場人物の評価にかかわる部分の語りが錯綜している。もっとも、この混乱は事件史と物語を対応させれば、ある程度まで解決できる。

3 ドレフュス事件史との照応

プルースト小説に描かれるドレフュス事件は、事件史との照応の糸口となる言及を伴っている。先に述べたように作品のこれらの部分は第一次世界大戦後に発表されたので、はたしてどれだけの読者がドレフュス事件史に筋の展開を重ねられたか定かではないが、しかしゾラ裁判からドレフュ

ス本人の再審決定に到る過程が、フォーブール・サン＝ジェルマンに住まう貴族階層の登場人物たちの位置関係、つまり語り手を視点とする領野における配置を、あたかも「万華鏡」をひと振りしたかのように変貌せしめたことは十分に読み取れる。

事件史と物語は照応している。『ゲルマントの方』のヴィルパリジ侯爵夫人のサロンのくだりは1898年2月のゾラ裁判と同時期であり、『ソドムとゴモラ』のゲルマント大公夫人の夜会は再審の決定される1カ月足らず前の1899年5月上旬である。

この間にゲルマント大公夫妻がドレフュス派だったことが判明し、ゲルマント公爵も再審支持に鞍替えする。また、ドレフュス派のスワンは夜会でサン＝ルーと語り手に近づいて、「今晚は。おやおや、三人そろってでは、サンディカのお集まりかと疑われそうだね」⁽³³⁾と冗談を言い、すでに反ドレフュス派に翻心していたサン＝ルーを鼻白ませる。そして、彼はゲルマント大公夫妻にまつわる打ち明け話の聞き手に、「先ほどあなたに言ったこと」を理由に語り手を選んだのだから、それが「サンディカ」への言及であるなら、語り手は少なくともスワンにとってドレフュス派である。

このように、ドレフュス事件という一触即発の主題（トポス）をめぐって登場人物の配置も語り手像も変位し、テキストの読みもまた揺らがざるをえない。

ここで、小説があまり触れない、当時のユダヤ系フランス人社会の動向について述べておかねばならない。アルフレッド・ドレフュス大尉への有罪宣告から1899年6月の再審決定まで、ユダヤ系フランス人社会の公認組織である長老会やユダヤ系代議士は表向き中立を保ち、したがって事件

の反ユダヤ性について沈黙した。このことはマラス以来すでに定説になっているが⁽³⁴⁾、近年のドレフュス事件史では、ユダヤ系フランス人がこの沈黙の政治の陰でどんな苦渋の選択をしたかに注目し、彼らが個人として（しばしば匿名で）悪魔島の受刑者のためになしたことを跡づける傾向にある⁽³⁵⁾。

ブルーストは1895年11月15日、つまりアルフレッド・ドレフュスが有罪宣告されてほぼ一年後に、レイナルド・アーンに宛てて、リュシアン・ドーデ家の晩餐会に招かれた模様を書き送っている⁽³⁶⁾。「人々は性格を、天分を、身体的習慣や人種によって論評しています。ミュッセとボードレールとヴェルレーヌの違いを彼らの飲んでいたアルコールの質から批評したり、誰彼の性格をその人の人種によってね（反ユダヤ主義です）」。

アーンはユダヤ系フランス人の詩人である。手紙の少し先で、たえず自分のことを知らないふりをして「闖入者」扱いする「魅力的な、だがきわめてブルジョワ的な」ドーデ夫人に触れているように、ブルーストは誰を招くかよりむしろ誰を排除し冷遇するかで品位を保とうとしがちな社交界の掟に敏感である⁽³⁷⁾。この時期、ブルジョワ家庭から排除されているのはユダヤ人に他ならない。ブルーストは続ける。「ユダヤ人（あちらで嫌悪されているが、どんな原則によるものだろう。なぜなら彼らが磔にしたお方もまた、そこからは、そして息子の結婚式からも追放されているのだから）」。

ここで言及された結婚について書簡集の編者コルプは、アルフォンス・ドーデの息子でリュシアンと兄弟のレオン・ドーデが、1891年に区役所に届けを出したきり教会での儀式抜きに結婚したことだという。さて、ブルーストの母、つまりアドリアン・ブルースト夫人ジャンヌ、旧姓ヴェイユはユダヤ教徒だが、その子マルセルは、誕生してすぐ洗礼を受けたカ

トリック教徒である。結婚後もユダヤ教信仰を貫いた母親を持つブルーストが、ドーデ家の反ユダヤ主義に気づかないはずがない。

一方で、これはルカナッチが指摘していることだが、ブルーストは母親の死にさいしてノアイユ伯爵夫人に、「母はパパと結婚してもユダヤ教信仰を改めませんでした、それは自分の両親に対するある洗練された敬意をそこに見ていたからなのです」と書き送っている⁽³⁸⁾。ここにはキリスト教徒と結婚し、息子（正統派ユダヤ教の教えによれば、ユダヤ人の母親を有することがユダヤ人と認定される絶対条件である）を幼時洗礼させるほど戒律から自立しているものの、ユダヤ教徒である親を悲しませたくないと思うほどには保守的な、19世紀末のユダヤ系フランス人、なかんずく同化ユダヤ人に典型的な双方向への配慮が見られる。信仰は私空間に閉じ込められている。ルカナッチは、「ユダヤ人であるというだけで十分だ。少なくとも如才なくそうあればよい」⁽³⁹⁾と書いているが、まさにブルーストはユダヤ人アイデンティティについて「如才なく」語ったのである。

ブルースト小説の語り手もまた、ドレフュス事件を注視しながら、めったに本心を明かそうとしない。これから事件史に物語を対応させながら、語り手が事件の進展をどう評価しているかを考えよう。

ヴィルパリジ侯爵夫人のサロンでノルボワが言い及んだ「現在進行中の民事訴訟」⁽⁴⁰⁾とはゾラ裁判に他ならない。ブロックが「彼らは二頭のライオンのように闘っています」⁽⁴¹⁾と形容したピカール中佐とアンリ中佐は、ともにゾラ裁判の証人である。証人の軍人たちのうちでピカールだけが被告に好意的だったこと、そして彼をアンリが「嘘つき」と罵ったことを、テキスト外に出るなら『イリュストラシオン』紙1898年2月19日号も報じていた。

言えないドレフュス事件

ただし、物語で語り手がヴィルパリジ侯爵夫人のサロンに赴くのはサン＝ルーとともに愛人ラシエルのリハーサルに立ち会ってすぐ後のことで、その前に二人は彼女をパリ郊外の自宅まで迎えに行っていた。パリのブルヴァールでは最初の葉が見えだしたばかりだというのに、そこでは桜が、「まだほとんど花も葉もつけない木々にまじって、この寒い日差しに、まるで雪と見紛うばかりに」⁽⁴²⁾咲いていた。プルーストは2月のゾラ裁判を田舎の散策のくだりで早春に置き換えている。

ドレフュス事件はただ名指しされるだけではない。語り手はサロンからの帰途、自宅の給仕長と隣家のゲルマント家の給仕長が事件のことで口論しているのを聞き、「フランス祖国連盟と人権同盟の知識人たちが上層で戦わせていた真実と虚偽とは、庶民の居る底にまで及んでいたのだった」と述べる。やがて、「フランスを上から下まで二分していたドレフュス派と反ドレフュス派の波はかなり静かだったが、まれに発せられる余波に偽りはなかった」と、サロンでのお喋りの背後にある激しい思想的対立に言及する⁽⁴³⁾。もとより語り手は、サロンに足を踏み入れるやブロックに目を止めて、「社交界の万華鏡が回って、ドレフュス事件はユダヤ人を社会階層の最底辺に追いやろうとしていた」⁽⁴⁴⁾と洩らしていたのである。

語り手はしかし、祖母の病と死、アルベルチーナとの交渉、そしてステルマリア嬢による手痛い約束不履行という、二度目のバルベック滞在に通じる主題を語るのに手いっぱい、ようやく読者はフランソワーズの、「もう九月も末です。美しい日々は終わりました」⁽⁴⁵⁾という言葉によって、冬の到来とステルマリア嬢の背景化を知るのである。

この間にテキスト外では、参謀本部のアンリが証拠偽造を告白し、拘置

所で自殺していた。アンリについて、語り手はヴィルパリジ侯爵夫人のサロンで語りの時系列的秩序を乱す形で言及していた⁽⁴⁶⁾。そこでは「ドレフュス派大臣」という、アンリ自殺後のカヴェニャック陸相の辞任と内閣改造の後でなくては、つまりサロンの挿話の半年先でなくては考えられない事態にも触れられていた。プルーストは語り手の叙述に、1920年代の読者の視点とゾラ裁判当時の視点を交錯させている。

さて、1898年秋の失意の語り手を慰めに現れたサン＝ルーは、彼をあるレストランに連れて行くが、ここはブロックらドレフュス派が裁判を傍聴した後も興奮醒めやらず、また裁判のあいだの空腹をなだめに立ち寄る場所だった。語り手は「知識人」めいたドレフュス派と主として貴族の反ドレフュス派とが、店内で截然と仕切られているのを見る。御者に一言あるサン＝ルーよりも先に店に入った語り手は、ドレフュス派ないし平民と判断されて、再審派の、しかも入口近くの凍てつくような席をあてがわれた。そのおかげで語り手はドレフュス派をつぶさに観察できたのである。事件史を参照すれば、この秋に急進社会党内閣が再審要請を破毀院に提出することを閣議決定したものの、秋からの国民議会が大荒れに荒れ、さらに左翼の社会主義者と反教権派が新たにドレフュス派に与してナショナリストと敵対していた。フォーブール・サン＝ジェルマンのカトリックで、しかも外国出身者を多く抱えるがゆえに殊更にナショナリストとして振る舞わねばならない貴族たちを、ドレフュス派は完全に敵にまわしていた。

次に挙げるのは、語り手がサン＝ルーの顔を眺めながら「夢想していた」ことを記した、きわめて重要な一節である。

「このカフェには、これまで見知っていたのだが、たくさんの外国人がいた。彼らは雑多な知識人、画学生で、身につけたこれ見よがしの袖なし

マント、1830年代風のネクタイ、なかならず彼らの不器用な仕草が笑いを掻き立てるのを忍び、そしてそんなことへっちらだと言わんばかりに笑いを挑発さえしていた。しかも彼らは真の知的・道徳的価値の持ち主であり、深い感受性をたたえていた。彼らは——主としてユダヤ人だが、もちろん同化していないユダヤ人のことで、その他の者たちは問題になりまい——風変わりで馬鹿げた様子を我慢できない人々の不興を買っていた（ブロックがアルベルチーナに嫌われたように）。一般に、それから人は、彼らが自分たちと比べて長髪すぎたり、鼻と目が大きすぎたり、芝居がかったぎこちない身振りをしていても、才知に富み、情に篤く、付き合いえば深く愛せる人々であると知るのだった。特にユダヤ人について言えば、彼らのうちでその両親が寛容な心、度量、誠実さを持ち合わせていない者はごく希であり、もし彼らと肩を並べたらサン＝ルーの母親とゲルマント公爵など、その素っ気なさといい、スキャンダルに眉をひそめるだけの見かけの宗教心といい、そして必ずや（独特に尊重された知性が思いもかけない道をたどって）莫大な金銭づくの結婚にゆきつくカトリシズムを家族で擁護しているあたり、徳の低さで見ると影もあるまい」。(47)

ここで語っているのはカトリック教徒なのか、同化ユダヤ人なのか、それともプルーストがそうであったように、その両方の属性を備えている者か。

ドレフュス事件に小説が初めて言及する前述の箇所では、語り手は、「わたしがまだ最初の聖体拝領をしていなかった頃、保守的なご婦人方は訪問先で優雅なユダヤ女性と居合わずと仰天したものである」と述懐していた。語り手は、したがってカトリック教徒だが、それは自動的にユダヤ人でないことの証明にはならない。カフェの外国人を指して、「主としてユダヤ

人だが、もちろん同化していないユダヤ人のことで、その他の者たちは問題になりえまい」と決めつける語り手は、外見に出た同化の程度に敏感である。「1830年代風のネクタイ」はプレイヤッド新版の注から、首に何重にも回して大きく膨らませた独特のものだと分かるが、ここでさらに重要なのは、1830年から翌年にかけてワルシャワ革命と呼ばれる大反乱が起き、ロシアの直轄地となったポーランドから多数の亡命者がフランスにやって来たことである。つまり、カフェの外国人はロシア・東欧系の習慣を保っており、しかも彼らはローマでローマ人のように振る舞うどころか、その異人性で「笑いを挑発さえしていた」。ゾラ裁判当時のカフェに、このポーランド亡命者の面影を認めた語り手は、明言しなくても外国籍ユダヤ人のドレフュス派活動に懸念を抱いている。この語り手は、しかし「鼻と目が大きすぎたり」するような外見の特徴と、才知や情、誠実さといった内面的価値を対立させ、概して「付き合えば深く愛せる人々」と断じ、さらに「特にユダヤ人について言えば」と、彼らのすぐれた道徳性を虚飾だらけのカトリック信仰と対比してみせる。語り手は同化ユダヤ人と同化していない外国ユダヤ人を峻別し、しかも現代のカトリック信仰に対するユダヤ人の徳の優位を称揚しているかのようなようである。つまり、この一節で語り手は、ユダヤ教徒を解放し同化せしめたフランス共和制を、その反教権主義も含めて擁護する者のひとりである。それは特殊な立場ではない。

フランス第三共和制のユダヤ系フランス人社会は脱宗教化していた。信仰が民族的アイデンティティの構成要件である度合いは年毎に減じていた。その証拠にドレフュス事件当時のデータをベンシモンらが婚姻記録から類推した数字（1895-1897）に見るなら、当時のパリのユダヤ人口のうち、フランス生まれの者は約三分の二にすぎず、外国生まれのユダヤ人の57

パーセントがロシア・東欧出身だった。1872年を最後に宗旨を訊ねる全国調査が行われなくなっていたので、キリスト教徒に改宗しなくてもユダヤ人であることを隠しやすく、そのため長老会やシナゴークの把握するユダヤ人に占める外国生まれ、あるいは端的に外国籍のユダヤ人の割合が増えたのだろう。両親がユダヤ教徒でありながらカトリック教徒と結婚し、子供をカトリック教徒として育てるプルーストの母親がどのように自己了解していたかは分からない。ユダヤ教徒であり続けた彼女はたしかにカトリックに改宗したユダヤ女性とは異なる。だが、ドレフュス事件当時のパリで、ベンシモンらの統計によればユダヤ人口の2割弱を占めたロシア・東欧出身のユダヤ教徒たちと比べれば、プルーストの母親の宗教的アイデンティティは希薄化していると言わざるをえない。そして、これら移民ユダヤ人は、長老会（正式名称はコンシストワール・イスラエリット・ド・フランス）の指導の及ばない独立系公会堂（オラトワール）に集い、同じ正統派ユダヤ教徒でもアルザス出身者の集まるトゥルネル街のシナゴークから拒絶されると、長老会の斡旋に期待しつつも同化ユダヤ人に背を向け始めた。

1883年に結成されたロシア学生連盟は、ユダヤ人枠のためにロシアの大学で学べない比較的裕福なユダヤ人子弟を集めた。最初のドレフュス派のひとりであるアナーキスト、ベルナル・ラザールが招かれて講演したこともある⁽⁴⁸⁾。

ついに政教分離後の1911年、移民および彼らを親とするロシア・東欧系ユダヤ人は共同体連合（Agoudath Jakehiloth [Agoudas Jakehilos]）を結成して独自の宗教活動を強め、1913年にはバヴェ街にロシア・ポーランド系正統派シナゴークの建設を始めた。共同体連合は長老会に認知を

求めて決裂すると、翌年の落成式に長老会ラビと世俗幹部を招待しなかった。公認ユダヤ人団体の機関紙としての歴史を持つ『アルシーヴ・イスラエリット』は、移民たちがパリのユダヤ人社会から一銭も借りずに独力でシナゴグを完成したことを言祝ぐよりも、むしろ共同体連合が「不平を鳴らした」ことを批判したという⁽⁴⁹⁾。プルースト小説の語り手は、この「同化していないユダヤ人」を切り離すことで、「その他の者たち」の存在が問題視されないように努めた。この配慮が、彼をユダヤ人らしく見せている。

ドレフュス事件当時、フランスのユダヤ人は必ずしもユダヤ系フランス人ではなく、しかもユダヤ系フランス人も必ずしもユダヤ教徒ではなかった。ユダヤ人とは、本人の意思にかかわらず反ユダヤ主義者からそう名指される者というサルトルの定義が適合するような、ユダヤ人アイデンティティの希薄化が、フランス国籍を有するユダヤ人の社会で進行していた。こうして、ハイマンによれば、パリのユダヤ教徒のうち政教分離法の成立した1905年にパリ長老会に属していたのは、その8年前の1897年にパリのユダヤ人口がおよそ4万4千人に達していたのに、わずか3,321名にすぎなかった⁽⁵⁰⁾。プルーストの語り手の回想する「優雅なユダヤ女性」は、こうしたユダヤ系フランス人の社会進出と、それに伴う民族的アイデンティティの希薄化、そして（保守性をもって鳴る社交界まで含んだ）キリスト教社会のユダヤ系フランス人に対する寛容さを物語るだろう。それが、ドレフュス事件で覆されていた。先ほどの長い引用で、レストランの語り手は、ロシア・東欧系ユダヤ人と同一視されるのではないかと不安げでいる。彼は反ユダヤ主義者のまなざしを内在化していた。

そのために、この夢想について語り手は、不可思議な観念連合の道をた